

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

指示表現の情意：語り手の視点ストラテジーとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): demonstrative expressions, discourse, perspective, narrator, emotivity 作成者: メイナード, 泉子・K, MAYNARD, Senko K. メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002153">https://doi.org/10.15084/00002153</a>

# 指示表現の情意

## ——語り手の視点ストラテジーとして——

泉子・K・メイナード

(ラトガース大学)

### キーワード

指示表現, 談話, 視点, 語り手, 情意

### 要 旨

本論文は指示表現の談話レベルの表現性を問うものであるが、認識論の中の視点という概念を用いて（具体的には「見え先行方略」を解釈過程の根底に据えて）語り手の態度や情意を伝えることを論じる。指示表現は、いわゆる現場指示のコソアの指示条件を基盤として、談話レベルでは(1)コ系は、言語行為を性格付けるメタ表現となったり、対象となるものを近距離の視点から描写し、心理的に近距離感を促す機能、(2)ソ系は、先行する情報の一部を受けて、またはそのように装って、対象を距離を置いて捉えながら談話を展開していく結束性の機能、(3)ア系は発話時点の談話の世界から遠く隔たった、情的に関心のある対象を共に見つめる共感を促す機能、があることを論じる。さらに、語り手と語られる内容との位置関係、物語の場面転換、ソ的な世界とコの世界的な世界の並列や内包、人間関係を考慮に入れたコミュニケーションの実現など、複数の機能を果たす。指示表現とは、最終的には、その表現を選んだ語り手の場における位置関係を指標し、語り手と対象との心理的・情意的な距離をも含むことを論じる。

### 1. はじめに

日本語の指示詞については、佐久間(1951, 1983)をはじめとして、正保(1981)、田中(1981)、高橋・鈴木(1982)、林(1983)、堀口(1978, 1990)、金水・田窪(1992a)、金水・田窪編(1992)、馬場(1992)、庵(1995, 2002)、Niimura(2003)など、多くの研究がなされてきた<sup>1</sup>。指示詞という範疇には、いわゆるコソア(ド)体系に含まれる指示代名詞、形容詞、副詞などが含まれる。本研究では、これらのうち次に示す表現を指示表現として考察の対象にする。指示表現という言葉が、指示詞とそれに後続する名詞の両方を指す意味で使われることがある(高崎1990)が、本研究ではコ系の「これ」「この」「こう」「ここ」「こんな(に)」「こういう・こういった」、ソ系の「それ」「その」「そう」「そこ」「そんな(に)」「そういう・そういった」、ア系の「あれ」「あの」「ああ」「あそこ」「あんな(に)」「ああいう・ああいった」に焦点をあて、それらを指示表現と呼ぶことにする。

本研究では、説明文、ノンフィクション、物語、論文などの談話における指示表現の選択が、そのディスコースを創造する語り手の視点とどのような関係にあるかを探る<sup>2</sup>。そして最終的には、指示表現は、あくまで主体がある表現性を実現するためのストラテジーとしてあり、それぞ

れの指示表現が持っている意味の可能性を操作したり利用したりすることで、情意の表現としても機能することを論じる。

分析の理論的背景としては、メイナード(2000)の「場交渉論」の立場をとる。従来現場指示に関連して指摘されてきたコソアの意味は可能意であり、コは現場に位置した自分に近い、ソは自分から距離がある、アは両者から遠いが共通した経験が認められる、という基本的な位置関係を示す。それが文章の中で文脈指示に使われるときには、コテキスト(cotext)やコンテキスト(context)の情報を統合して、情意を含んだ交渉意として実現する。指示表現には語り手の位置を明らかにする機能があり、その位置からの語り手の視点と、それに応える読み手の視点の共有が意味解釈のヒントとなる。筆者はメイナード(2000)で意味解釈について、あるものを同じ視点から見つめること、つまり読み手が語り手になって見るという「なる視点」を経験することが、市川(1975)の言う「感応的同調」という情意の理解につながっていくことを説明した。このような解釈がなされるのは、指示表現だけではないが、指示表現はまさにこの視点の操作に直接関わるストラテジーなのである。

日本語の指示表現には確かに体系があり、その体系を細かく分類・分析していったり、指示表現の使用・非使用の条件を明らかにすることで、そのメカニズムが理解できる側面がある。しかし、それだけでは充分ではない。指示表現が実際のディスコースでどのような意味を伝え、どのような談話全体の表現効果を狙って使用されるのか、という素朴な疑問が残っているからである。本論文では先行研究で明らかにされた体系や使用制限をヒントに、指示表現が伝える心情的な意味をも視野に入れて考察していきたい。

なお、筆者はメイナード(1997, 2000, 2004)およびMaynard(2002)で「パトスのレトリック」を論じたが、日本語の指示表現も、日本語のディスコースのパトス的な表現性という大きな流れの中で捉えることができる。さらに、筆者はメイナード(2004)で、談話言語学という研究領域を提案したが、今回の考察もその領域に属するものである。

## 2. 先行研究

指示表現の研究で特記すべきは、やはり佐久間鼎の研究であろう。周知のように佐久間(1951)はそれまで代名詞や連体詞や副詞として別々に論じられてきた現象を、コソアドを共通項として一群の表現にまとめ体系化した。コソアドをそれぞれ近称、中称、遠称、不定称として性格付け、さらに「話し手のなわばり」をコ、「聞き手のなわばり」をソと見る理解の仕方を提唱した。なわばりは本来、具体的な場に基いていて現場指示の説明に使われたのだが、文脈指示にも応用できる。この意味で、現在でも佐久間のなわばり論は意義深いものがある。

近年、指示表現については、談話管理理論や認知言語学の影響を受けた興味深い研究がなされてきた。例えば金水・田窪(1992a)は、話し手の心的領域を直接経験的領域と間接経験的領域に分け、前者に入るものにはコ・アを使い、後者に入るものにはソを使うと指摘する。具体的には、直接経験的領域に入るものは、話し手が現場で知覚的に把握する対象や話し手の過去の経験に結び付く対象で、間接経験的領域とはおもに言語概念によって構築される領域である。このよ

うな認知経験に基いた分類は、佐久間のなわばり論と矛盾せず、指示表現が、基本的にコ・ア系とソ系とに分けられるという伝統を維持している。同様に、金水(1990:66)でも、コ・アとソの差について、「コ・アの探索領域は、話し手から見た環境を直接反映したもの」であり、「ソの探索領域は、話し手の視点に対し、なんらかの意味で間接的なスペース」を指し、このスペースは聞き手の視点を介して設定されるという指摘がある。

数多い指示詞に関する先行研究のなかで、本論文と直接関係があるのは正保(1981)である。正保(1981)にはア・コ・ソの用法についての具体的な説明がある。まず、観念指示のアは、対象に対して話し手と聞き手の間に共通の理解がなりたっている・いないにかかわらず用いられることもあるが、文脈指示では聞き手がアで示される対象について、話し手と共通の理解を有する場合、また以前話題になったものに限って使われると指摘する。正保は続けて、アで指示された対象はその全体像つまり「イメージの総体」を指し、話し手か聞き手がその対象に対して「懐旧の念を抱いているか、もしくは、その対象を熟知しているという含みが感じられる」と述べている(1981:85-90)。

さらに正保(1981)はソについて、先行文脈や先行談話にのみ基いて、あるいは、そう装って、指示する時用いられ、自己が関心を寄せている領域の外にあるものを指す、としている。そして対象の全体像ではなく、部分的な説明を指すことが多く、アカコで指示しうる条件が揃っていても客観的で冷静な指示を装う時に使う、と付け加えている。コについては、話し手がそれに対して強い関心を寄せている時使われ、「聞き手も同様に『コ』で指示せざるを得ないような位置、つまり話し手のなわばりの中に聞き手をひっぱり込んでくるような働きがある」(正保 1981:92)と説明している。加えてコは情報の焦点となるものを指示することが多く、ある文のテーマ(主に主語)が、その直前の文またはパラグラフを受けているような場合はコが使用されるのが普通であると述べている。

以上見たように正保(1981)には、後に談話管理論をはじめとして談話における指示表現の研究でとりあげられているいろいろな使用法が指摘されているが、本論文では、コソアの基本的な意味が、(1)情意を帯びて理解される動機や過程について、(2)指示表現が、談話を作成する言語行為と表現される内容との両方の指示関係を実現していること、(3)談話の断片を性格付けるコ的世界と情報内容を管理するソの世界の特徴について、(4)コとソが継続したり、コがソを内包したり、コ・アとソ間のシフトをしたりすることで語り手が前景化すること、などに焦点をあてる。そしてこれらの効果が指示表現が実現する語り手の視点操作に支えられていることを論じる。

### 3. 視点

視点は Uspensky(1973)の先駆的な研究にあるように、文学や絵画の製作者と作品との間の関係として捉えられてきた。視点は、具体的には Uspensky(1973)が viewing position という表現で捉えたように、作品製作者が自分を置く位置であり、これは松木(1992)の言う「視座」のことである。しかし、視点という概念は、viewing position をも含みながら、作品製作者だけでなく、

登場人物の視点や、その視点の移動・操作、複数の視点などが生み出す効果というように広義に使われることが多い。本研究でも視座をも含む意味で視点という表現を使う。視点の概念は言語学や日本語学の分野でも、特に文法を分析する際導入されてきた。代表的なものは久野(1978)で、久野にとっての視点は、おもに話し手が文や談話の中のどの登場人物の側に立って事態を眺めているか、というカメラアングルの意味である。いずれにしても、言語表現者と描写する事態との関係は広く視点という概念で捉えられてきた。本論文では、このような視点の概念をさらに広げ、認識論から論じている宮崎・上野(1985)に従って、特に、視点が談話における意味の解釈や、語り手の心情や感情とどのように関わっているかを探る。

指示表現は、概してある対象に言及する言語手段であるが、それは、その表現を選んで使う者の視点の表現に他ならない。特に指示表現は見るという行為を反映しているのだが、宮崎・上野(1985)は、見るという行為について次のように述べている。

見るということは常に自己を含んだ世界を見るということにほかならない。あるいは、見るということは、関係語でしか語ることができない。私たちが見るものは、単に“われ”ではないし、また“それ”でもない。見るということは、むしろ“われ—それ”の関係のあり方を見るということなのである。

(宮崎・上野 1985:81)

指示表現は、見る者と見られる対象との関係のあり方を指標するのであり、「対象の見えやその変化のあり方の中に自分の視点の位置やその動き方の情報が含まれて」(宮崎・上野 1985:82) いることになる。「見るということは、単に対象や自分の周囲の環境を見るという対象知覚にとどまらず、対象や環境に対して自分がどこにいるかを見るという視点知覚を伴っている」(宮崎・上野 1985:98) のである。それは視点と対象との関係のあり方を認識することであり、言語の表現が単に対象だけ、または語り手だけに関わっているのではなく、自己と対象との関係のあり方に関わっていることを示唆している。指示表現とは、指示する者の位置や立場と対象との関係のあり方をより明確に知らせる手段なのである。

宮崎・上野(1985)は、例えば文学作品などに表現される感情や心情を理解する際、その人の見えを理解することによって共感的理解に至るという立場をとっているが、それを「見え先行方略」と呼んでいる。「見え先行方略」とは、見えのあり方から、その見えを経験している他者の心情を知るという解釈方法である。他者の気持ちを直接知ろうとするよりも他者に作用している刺激を自分のものとして想像する方が、より強い共感へつながるとする立場である。つまり、出来事が他者によってどのように見えているかを知らなければ、深い他者理解はできないと言えるのだが、指示表現はより具体的にその出来事をどのように捉えているかを知らせてくれるストラテジーとして機能する。このため、選ばれた指示表現を観察・考察することで、語り手がどのような心情で語っているのかを理解することができる。本研究では、この「見え先行方略」を解釈過程の根底に据えて、指示表現が語り手の語りの態度や情意を伝えることを論じていきたい。

#### 4. コソアの談話における表現性

先行研究を踏まえて、指示表現コソアの談話上の現象について、筆者は次のように考えている。ここでは概観を提示し、後続するセクションで、実例を示しながら詳しく考察する。

	コ系	ソ系	ア系
基本的な可能意	語り手に近い	距離がある	両者から遠い
現場指示	近	距離がある	遠
文脈指示	近距離のもの	先行するもの	遠距離のもの
対象	近い・近く扱う	距離があるとする	遠い
対象と認識世界	語り手の世界で 特定し確立	語り手の世界だけでは 未確立と相手に伝える	語り手の世界で 特定し確立
捉える側面	全体のイメージ	個別情報	全体のイメージ
言語行為の性格付け	メタ表現として言及	結束性のある情報提示を する言語行為を実現する	発話や人間関係 の調整
語り手の位置	近い	ある距離をおく	離れている
心情・情意	親近感・大切	中立	親近感・共感
心的作用	引き入れ・引き寄せ	離れる	記憶の喚起

コ系の指示表現は、基本的に語り手と内容が近いという意味を伝える。間接的に語り手のそのような位置を示すことになり、そのような語り手は、言語行為も内容も身近で親しく、大切なもの、または否定的なものも含めて感情的な思い入れがあるものと捉える。語り手の世界の中で特定し確立できる対象として一方的に提示する。そのような理解を相手にも求めるというアピールの仕方である。コはイマ・ココからの視点を指標するので、言語行為それ自体についても言及するメタ指示表現となる。

ソ系の指示表現は、基本的に語り手がある距離を保つという態度を伝える。語り手はそのような位置から対象を描写することになる。先行するものとの中立的な距離を保ちながら談話の結束性を実現する。語り手が、相手の意識の中に対象がまだ完全に確立しないという判断をして、ソ系で何らかの情報を加えるという態度を伝える。

ア系の指示表現は、対象が遠いところにあるとしても、語り手の心情は近く、親しい・懐かしい・いまいまいしい・残念だなど、感情的な思い入れのある情意を伝えることになる。なお、この対象は相手の記憶の中に認知できるものもあるが、具体的な指示対象がない場合もある。自分と相手の記憶や想像の中に共通の感情の対象となるそのイメージの全体像を共有するという思いを経験することによって、「感応的同調」に至る。

このようなコ・ア系が情意的な要素をもつものに対して、ソ系が距離をおいた表現であるという捉え方は、堀口(1978)の「ホット・クール」という表現と矛盾しない。また堀口(1978)はコソアについて「強烈指示」の近称コ・遠称アと「平静指示」の中称ソという性格付けをしている。正

保(1981)は、ソについて、それが事実ではない、つまり仮定や空想に基づいた叙述内容を受ける時や、その正体がはっきりしない指示対象、焦点でない部分、また自分の意見ではないということをはっきりさせる場合使用するのが普通であると述べているが、これらはすべてある距離を保つという語り手の視点と矛盾しない。

ところで、指示表現の研究では、現場指示(眼前指示, Halliday and Hasan(1976)の exophora)と文脈指示(Halliday and Hasan(1976)の endophora)を設け(林 1983)、具体的な対象と観念的な対象を分けて分析する伝統がある。視点論から言っても、現場指示と文脈指示には確かに異なった視座が認められるのだが、実際は、これらが統合されていると見る方が妥当であろう。文脈指示には、現場指示の意味が可能意として生き続けているからで、それをそのように見ることで、文脈指示のコソア使用の動機を理解することができるからである。さらに、後述するように、言語行為自体に言及する指示表現が、語り手にとっては現場指示につながることで、また語り手がその現場である記憶を呼び起こして観念的な指示表現を使ったとしても、それと同時に作品の中に既出している場合には文脈指示ともとれるからである。談話に使われる指示表現は、むしろ、複数の指示操作を統合してその重複する効果を狙っていると言えるのである<sup>3</sup>。

## 5. コ系とソ系の選択と使用状況

指示表現と語り手の視点を観察するためにまず、次のディスコースの断片を観察しよう。これは、エッセー風に人生論を語ったもので、広義の説明文と言われるジャンルの文章である。

- (1) <sup>[1]</sup>人から見捨てられても、かまわない。<sup>[2]</sup>私は、私の人生を生きていく。<sup>[3]</sup>a こんな姿勢を貫いて、アグレッシブに人生を生き抜いていくために、必要なもの。<sup>[4]</sup>b それは、「c この人だけは、いつも私を、どこかで見守ってくれている」。<sup>[5]</sup>d そう思える人の存在です。

「<sup>[6]</sup>e この人だけは、何があっても、私を決して見捨てない」「<sup>[7]</sup>いざというとき、必ず私を守ってくれる」。<sup>[8]</sup>支えてくれる」

<sup>[9]</sup>f そんな人の存在を、どこかで感じているからこそ、強気の人生を送れるのです。

<sup>[10]</sup>逆説的な言い方になりますが、g この人生を孤独に生き抜いていくとき、どうしても必要なのが、どこかで自分を無条件に支え、見守ってくれている人の存在です。

「<sup>[11]</sup>h この人は、私を無条件で支えてくれる」。<sup>[12]</sup>私が、多少のヘマや失敗をして世間から見放されたとしても、i この人だけは、私の味方になってくれる」

<sup>[13]</sup>j そう思える人の存在です。

<sup>[14]</sup>k この、無条件の支えがあるからこそ、l それをバネにして、人は、ひとりで生きていくことができるのです。

<sup>[15]</sup>ふだんはほとんど意識していなくても、“私は、m この人に無条件に支えてもらった”という経験があり、実感があってはじめて、ひとりで生きていくためのふんばりが効くのです。

[16]多くの人にとって、n それは、両親であるかもしれません。[17]o それが、祖父母である場合もあるでしょう。[18]恩師である場合もあるでしょうし、大学や職場の先輩や友人である場合も少なくないでしょう。

[19]一人か二人でかまいません。「[20]いざというとき、p この人の前なら泣ける。[21]助けを求められる」という人を得ていること。[22]そして、つらくなったとき、時々、q その人のことを思い浮かべることができること。[23]r このことが、孤独な人間にとって、どれほど支えになるかしれません。

[24]場合によっては、既に他界している人であってもかまいません。[25]まだ会ったことのない芸能人や作家、物語のキャラクター等でもかまわないでしょう。[26]s その人のことを心の中で思い浮かべ、「心の中のt その人」と対話をするのです。

「[27]u あの人なら、こんなとき、どう言ってくれるだろう？」—— [28]v そんなふうに心の中で思い浮かべることのできる、具体的な他者が存在すること。[29]w その人から、いつも、どこかで見守ってもらっている、という実感があること。

[30]x これが、ひとり、アグレッシヴに生きていくために、必要な支えとなってくれるのです。

(諸富祥彦 2001『孤独であるためのレッスン』pp. 119-121 NHK ブックス)

このディスコースの断片ではコ系とソ系が混用されているが、引用内部のコ系指示はそのままにして、語りの部分の指示表現をコ系で統一したバージョンとソ系で統一したバージョンとを考えてみたい。なお、当然のことながらコとソの転換がより不自然なものもあるが、程度の問題であり、不可能ではない。以下、それぞれのバージョン（最初の部分のみ）を示す。

コ系で統一したバージョン：

人から見捨てられても、かまわない。私は、私の人生を生きていく。こんな姿勢を貫いて、アグレッシヴに人生を生き抜いていくために、必要なもの。それ（？これ）は、「この人だけは、いつも私を、どこかで見守ってくれている」。こう思える人の存在です。

ソ系で統一したバージョン：

人から見捨てられても、かまわない。私は、私の人生を生きていく。そんな姿勢を貫いて、アグレッシヴに人生を生き抜いていくために、必要なもの。それは、「この人だけは、いつも私を、どこかで見守ってくれている」。そう思える人の存在です。

コとソの使用制限について金水・田窪(1992a)、庵(1995)などいろいろな見方があるが、ここではこれらの考察を踏襲した堤(2002)からヒントを得て次のように考えることができる。ソは先行する名詞そのものというより、それに関連した状況を含めたもの（庵(1995)の言う「テキスト的意味の付与」）を指す。話し手が聞き手に指示する対象はまだわからないままであることを伝



える時使う。コは話し手が一方的に自分でそのイメージを確立し、納得し、判明できるとする時使う。もちろんコ・ソの使用は最終的には語り手の選択によるのだが、確かにコとソにはこのような使用制限があるため、交換すると不自然な場合がある。どちらでも自然であると解釈できるものは、堤(2002)の言う話者の世界と外界とのインターフェイス(Wp)を介して話者の世界(Ws)に対象が登録される場合で、自分の世界中心か、インターフェイス中心かによって使い分けていると考えることができる。

コ系で統一したバージョンでは、語り手が常に語る内容に近距離の位置にいる。この場合心情的には、語り手に近い大切なこととして、しかも相手にもそう思っただけとアピールする機能を発揮する。これに比較してソ系で統一したバージョンでは、語り手が内容からある距離を置いた場所に位置する。ソ系で統一することで、より中立的に、あたかも自己の深い関心事の領域の外にあるような指示の仕方である。そこには、客観的で冷静な態度を装うような雰囲気がある。

オリジナルでは、コ系とソ系が混用されているのだが、これは、語り手が自分の位置を移動していることを意味する。つまり、語り手は、内容と自分との関係を近距離に置いたり、どちらかという、少し距離を置いたりして、視点の移動を繰り返す。特にa, g, k, m, r, xでコを使っていて、語り手が、内容に近い位置に自己を置き、それと同時に相手もコで指示せざるを得ないような位置、つまり話し手と近い位置にひっぱり込む効果を狙っている。

さらに、視点移動は、ソで先行する要素の一側面を指したり、コで発話行為全体や状況を指したりすることで、談話の内部構造を知らせる役目も果たす。全体的には(a, rおよびxのコに見られるように)要旨に関わる部分でコを多用しているが、それは、コ系の指示表現が自分が主張したい、思い入れのある言語行為を指標するからである。コで重要な情報を提示し続け、これによって、ディスコース全体の表現性を性格付けているとも言える。

## 6. コ系の情意：心理的な近さと言語行為の性格付け

指示表現がどのような視点の操作に使われているかをさらに明らかにするために、コが使われている例から幾つか見ていこう。まず、物語の中でコが使われる場合と使われない場合があるが、それにはどんな効果の差があるのか、という問いに答えたい。次はまんが絵本『鶴の恩がえし』の一部であるが、ページを繰るたびに新しく変わる絵を見ながら解釈するようなディスコースである。なお\*\*\*は、絵本の場面転換を示す。

- (2) おじいさんは、おしげもなく、まきをいろりにくべました。おばあさんも、あたたかいおかゆをつくって、たべさせてあげました。

「ほんとうに、ありがとうございました」

むすめは、ゆっくりはなしはじめました。きいてみると、このむすめには、ゆくあてがないということなのです。

「それは、それは……かわいそうにのう」

\*\*\*

おじいさんもおばあさんも、たいそう、きのどくにおもいました。それにふたりとも、このむすめがきにいましたので…

「のう、むすめさん。それならいっそ、わしらといっしょにくらしなされ。どうじゃな」

\*\*\*

「はい。わたしも、こんなにうれしいことはございません。よろしくおねがいたします」

(略)

さて、そのよく朝。あけがたにはまだ、まがあるというのに、むすめは、そっとおきだしました。

(愛プロ／グループタック 1976『鶴の恩がえし』 pp.11-14 サラ文庫)

この部分で、「むすめ」と「このむすめ」が選ばれている。「このむすめ」は他のむすめとコントラストしているわけではなく、いわゆる指示詞の非限定用法にあたる。非限定的用法で「このむすめ」とすることは、物語に登場してきたむすめ、今まで説明したむすめ、という意味を含めてである。つまり、語りの行為そのものに間接的であれ、言及することになる。それによって語り手は読者に語りかけ、共通の思い入れを共に経験するようにアピールするのである。

かつて長田(1984, 1995)は、指示詞を「持ち込み詞」と呼び、この・その・あのが特定の文脈の中に位置した場合、具体的な意義を獲得することになるとして、その場合、先行表現もしくは後行表現を持ち込んでくることを指摘している。例えば、先行する花についての描写を受けて「花」ということもできるし、「その花」ということもできるのだが、「その花」という場合には、その対象を「個性性の極限に近づける働き」(長田 1995: 96)を伴って持ち込む。つまり、指示詞それ自体の意味や、それが指し示す対象そのものの意味ではなく、先行する情報の一部を文の中に持ち込んでくるという理解の仕方である。

物語の主要登場人物であるむすめにどのような表現で言及するかは、根本的には語り手に与えられた選択である。ただ「むすめ」というより、「このむすめ」ということで、物語で語られたむすめを指すことになり、結束性が実現する。しかも「そのむすめ」でなく、「このむすめ」であるところに、親近感などが強調される。物語では2回だけ「むすめ」ではなく「このむすめ」となっているが、「この」を用いることで、共感、親近感、強調などの効果が前景化される。語り手があえて「このむすめ」を選んだのはそのようなディスコースの解釈を促すためと思われる。金水(1990: 66)は、「指示詞の本務は、視点からの心理的距離を利用したトークンの探索指令である」と述べているが、私達はまさに、そのような指令を受けて情意を解釈すると考えることもできる。

コ系の指示表現は、それが現場指示で話し手の近距離にあることを示すことを利用して、物語の場面シフトに用いられることもある。前例と同様『鶴の恩がえし』からの例である。

(3) やがて……

しめきった機屋からは

キイ、トン、カラ

\*\*\*

キイ、トン、カラと

はた織りのおとが、

ながれはじめました。

\*\*\*

このおとに、ぐっすりねむっていたおじいさんも、おばあさんも、目をさしました。

むすめの寝どこをみると、からっぽなのです。ふしぎにもっておりますと……

(愛プロ／グループタック 1976『鶴の恩がえし』 pp. 17-20 サラ文庫)

ここでは「そのおと」でなく「このおと」になっているが、その理由は何なのだろうか。絵本のこの部分は新しいページで、そこにはおじいさんとおばあさんがふとんの中で目覚め、耳をそばだてている様子が描かれている。つまり、語り手はおじいさんとおばあさんの視点から、音を「このおと」としてかれらに近いものとして提示しているのである。「そのおと」でも語用論の観点から言えば誤りではない。先行する「はた織りのおと」を受けて結束性を実現するからである。しかし、それでは語り手が選んだ視点を伝えることができない。ここでの指示表現は、あくまで語り手の描写方法のストラテジーとして選択されていることがわかる。

「この」と「その」の語りの効果に関連して、林(1983)の説明が参考になる。林は『夢十夜』を分析しているが、その中に出てくる「この時」と「その時」の差について、『その時』は、突き放して描く世界でのシーン連続を作るのに適したことばとなり、『この時』は、わがことの世界的世界を作り出すのに適したことばとなる」(林 1983: 29-30)と述べている。『鶴の恩がえし』では、機を織る音が「このおと」として出てくるのは一度だけなのだが、林の指摘する通り、物語の場面の操作に関係していて、確かに場面転換を指標するストラテジーのひとつとして使われている。

コ系の指示表現は、現場指示の近距離感という可能意を引き継いで、その場で語る語り手の視点の標識として機能する。このため語り手が語りの世界に登場し、語る行為が前景化される。つまりコ系は、言語行為の性格付けにも役立つのである。次の「よだかの星」の一部を観察しよう。

- (4) よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺん空を見ました。そうです、これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがってはいましたが、たしかに少しわらって居りました。

ここでは、「それ」ではなく「これ」が使われているが、その理由は、「そうです」という間投詞的表現からもわかるように、ここで語り手が語る姿勢を明示するからである。語りの現場性が前景化され、語り手が直接その場で経験していることを反映して「これ」が選ばれる。この引用した部分の前後では、内容を伝える目的で「その」が使われているが、それらとのコントラストによって、読み手は語り手の登場を感じとるのである。

現場指示という本来の意味をひきずりながら、コ系の指示表現がディスコースの種類を性格付けたり、それをシフトする場合がある。次は小説の一部であるが、コが咲枝の内面を表現する心話を指標し、それによって、その部分のディスコースが直接話法的な性格を帯び、他の部分とは異なったものであることを伝えることになる。

- (5) 気がつくのとあのビルの前に来ていた。三階の窓にやはり「ナミマプロ」のお洒落な感じのロゴがあった。

そのことを確かめるだけのつもりで、だからどうするという考えもなかったのだが、こうなってみると、このまま帰ってしまうのが惜しくなった。咲枝のことを子供扱いした浅見を出し抜くには、絶好のチャンスでもあるのだ。

(内田康夫 2002『しまなみ幻想』p. 230 光文社)

コ系の指示表現が心話文的な直接引用のような効果をもたらすのは、話し手が相手の情報把握にかまわず自分で勝手に納得した対象として一方的に提示しているからである。「そうなってみると、そのまま帰ってしまうのが惜しくなった」とすると、距離を置いた(堀口(1978)の言う「クール」な)語り手の視点が維持される。そして堤(2002)も指摘しているように、ソ系の指示表現を使った場合は対象が完全に確立されているものでなく、他の情報が加えられることを伝えることになるので、さらに距離感が感じられる。このようにコ系の指示表現は、心理的な近さを表現したり言語行為の性格付けをしたりしながら、物語の内部構成の操作にその効力を発揮することもある。

## 7. ソ的世界とコ的世界

談話の中には、ソ系の指示表現とコ系の指示表現が集中する断片がある。このようなディスコースには、それぞれが創造する違った世界があり、語り手の視点のあり方やそのシフトが観察できる。次は広く説明文と言われるジャンルの文章である。

- (6) <sup>[1]</sup>死体とは何か

<sup>[2]</sup>かつて死とは何かについて考えようとした際に、「死体とは何か」ということについて考えました。<sup>[3]</sup>それは解剖という仕事をするうえでは必然でもありました。

<sup>[4]</sup>なぜ「死」ではなく、「死体」かといえば、少なくともそれは具体的なものであるからです。前述した通り、死の定義は非常に難しい。<sup>[5]</sup>死体は一種の物体ですから、ある意味で客観的だと思われる。<sup>[6]</sup>それに対して「死」というのは非常に曖昧で抽象的な概念です。

<sup>[7]</sup>だから私は、普段は死という言葉を使わないで議論をしてきた。<sup>[8]</sup>それよりは死体で議論したほうがわかりやすい。

<sup>[9]</sup>そういうわけで死体について考えはじめて、あることに気がつきました。<sup>[10]</sup>それは、客観的に「死体」という均一なものが存在しているわけではないということです。

<sup>[11]</sup>死体には三種類あるのです。<sup>[12]</sup>「ない死体」「死体でない死体」「死体である死体」の三種類です。<sup>[13]</sup>これと対応する人称があることに思い至った。<sup>[14]</sup>人称というのは、英語でみなさんも習った「一人称」「二人称」「三人称」というあれです。<sup>[15]</sup>死体についても、これとまったく同じ区別をつけて考えることが出来る。

<sup>[16]</sup>一人称の死体

<sup>[17]</sup>まず「一人称の死体」。<sup>[18]</sup>英語でいう一人称はすなわち I です。<sup>[19]</sup>つまり「俺の死体」です。<sup>[20]</sup>これは「ない死体」です。

<sup>[21]</sup>もっとも身近なもののようにも思えますが、実はこれは存在しません。<sup>[22]</sup>言葉としては存在していますが、それを見ることは出来ないのです。

(養老孟司 2004『死の壁』 pp. 76-77 新潮社)

この部分では、死体とは何かという全体的なトピックを提示し、それに関連した情報を [3] から [10] までソ系の指示表現で受け続け、ソによる結束性が実現する。[11] で「死体には三種類ある」という具体的な語り手の考え方が紹介されると、「これ」で受けることが多くなる。さらに [16] の「一人称の死体」という見出しの後も、「これ」で受けることが多くなっている<sup>4</sup>。

このディスコースの部分には、前半のソの世界と後半のコの世界が並列している。ソ的な世界では、語り手は「死体」という概念を論理の背景として、文章構成から言えば序論として提示している。このため、語る位置は、ある距離を隔てたものとなり、中立的な印象を与える。死体の三種類を紹介し、一人称の死という概念に入ると、コ的な世界が出現する。この部分は序論より大切な論旨に近いものとして提示されている。これはコが身近なものであり、自分が実感している内容であることを伝えるからである。語り手はソ系の世界とコ系の世界を並列することで、視点のシフトを実現し、それにともなった情意のシフトを表現することになる。

ソ系の特徴として、ソ系の指示表現が先行文脈や先行談話に関連して、または、そう装って使われることから、継続して結束性を実現する形態になっていて、文脈が次々に展開する印象を与える。この件に関連して、馬場(1992)による指示語の文脈展開機能についての研究がある。馬場は、文脈展開力の強弱という概念を紹介し、言語的文脈・意味的文脈を参照先とする直接的文脈展開と、観念的文脈・現場的文脈を参照先とする間接的文脈展開とを比較しているが、前者の方が後者より文脈展開力が強いと指摘する。ソ系の指示表現は、一般的に言語的文脈や意

味的文脈を参照とすることが多いので、文脈展開力がコ系やア系と比較しても強いと言える。ソ系の世界はその意味で結束性が維持され、文脈の展開が比較的明確になされることになる。加えて庵(2002:12)は幾つかの名詞が「その」を伴って連鎖される現象を「しりとり的連鎖」と呼んでいるが、「その」がこのような目的に用いられるのも、情報の結束性を実現するための強力な戦略であることを示していると言える。

コ系の世界とソ系の世界の関係では、前者に後者が内包されている例もある。特にコが言語行為の性格付けの一部として談話自体に言及するメタ指示表現として機能する場合、より大きな談話の単位を指示することになる。コで談話行為に言及し、ソでその中の情報に結束性を与えるという異なった役割が課せられ、コが全体を指し、ソが部分的なものを指すという内包関係が生まれる。この場合、ソが新しい情報提供に関連することが多い。次は学術論文から抜き出したものである。

- (7) 一般に公共図書館においては「蔵書はその新鮮さが生命」とであると言われている。ここで仮に小学校一校あたりの蔵書冊数を6,000冊とし、年間購入冊数を300冊とした場合、全ての図書資料が入れ替わるのに20年かかることになる。もちろん、学校図書館と公共図書館ではその目的や性格に違いがあるので一概には言えないが、授業などで用いる学習用資料ではなく、読み物としての図書資料の充実という点から考えれば、子ども達にとって学校図書館は新鮮味に欠け、魅力に乏しい存在だと言ってよい。

今後、総合的な学習の時間の導入にともなって図書資料を使った調べ学習も多くなることが予想され、そのテーマには時事的なものも含まれることを考えれば、授業用に限定しても新鮮で豊富な図書資料が求められる。加えて学校図書館の役割として、カリキュラム改革にともなって、教師の授業研究への支援もいっそう求められることになる。こういった授業に用いる資料を購入すれば、それ以外の読み物を豊富に導入することは、現実的には難しいと考えざるをえない。

(遠藤和士他 2003「小学校に併設された公共図書館」 p.6『大阪大学大学院人間科学研究紀要』29, 3-18)

「ここ」はメタ指示表現であり、「その」は内容に関する結束性を実現する。また「こういった」はより広範囲の談話情報を含んだ意味を持ち込む例である。指し示す対象そのものの意味ではなく、より広く先行する情報の一部を文の中に引き寄せる。(7)で示された学術論文の断片では、論文の構成・展開に関するコ系の指示詞と、内容に関するソ系の指示詞が、それぞれの機能を果たすことで、一貫性と結束性の実現を可能にするのである。

## 8. 照応の方向と談話の境界

周知の通り、指示表現はその表現と指示されるものとの位置関係によって、前方照応と後方照応に分類される。前方照応は先脈指示とも呼ばれ、英語の文献では Halliday and Hasan(1976)の

anaphora という用語が、また後方照応は後脈指示とも呼ばれ cataphora という用語が定着している。例えば次例の [1] の「こんな話」は後方照応、[18] の「この話」は前方照応になる。コ系の指示表現は、両方向に向けて使用されることが知られているのだが、ここでは、それらが談話の構成単位の境界をより明確にする現象を観察しよう。次は説明文と言われるジャンルの例である。

- (8) <sup>[1]</sup>ある女子高校生が「私は泣きやすい」と言いながらこんな話を教えてくれた。<sup>[2]</sup>高校の合格発表のときももちろん泣いた。<sup>[3]</sup>まわりにも泣いている子はけっこういた。<sup>[4]</sup>でも、そのあと入学したら、その年は全入（受験者は全員合格）だってわかったの。<sup>[5]</sup>ちょっと恥ずかしかったあ。<sup>[6]</sup>受験番号などを見たらすぐに全入だとわかりそうなものだが、「そこまでは気づかなかった」と言う。<sup>[7]</sup>彼女や友だちは、好きなお笑い芸人のライブに行っても「うれしくて大泣きしちゃう」のだそうだ。<sup>[8]</sup>熾烈な入試争いを突破したからとか、その内容に感動したから泣くというよりは、泣けるような状況が訪れたと思ったら、とりあえずはそれを逃さず泣いてみるのだろう。

<sup>[9]</sup>これはこの高校生に限ったことではないようで、今、いろいろな場面で涙を流している若者を見る機会は少なくない。<sup>[10]</sup>サッカーの試合会場で「勝った」「負けた」と泣いている若い男性も、今ではめずらしくない。

<sup>[11]</sup>いったい彼らは、何に対して涙を流して泣いているのか。<sup>[12]</sup>そこに、悲しい、悔しい、すばらしい、などといった明確な感情や理由はあるのだろうか。<sup>[13]</sup>また、その涙に場面や状況語ごとの違い（たとえば「うれし涙」と「悲しい涙」など）は認められるのだろうか。

<sup>[14]</sup>どうもそうではないようだ。何倍の競争率かも調べずに、とにかく自分が合格したと言って大泣きした冒頭の例にあるように、彼らは目の前にいつもと違う場面や状況が現れたときの一様な反応として、涙を流してしまうのではないか。<sup>[15]</sup>あるいは、そういう中に「自分がいる」ということに心を動かされて、泣くのではないだろうか。<sup>[16]</sup>つまり、ひきがねとなる刺激が何であるにせよ、結果としては「大泣きする」という同じ反応が起きてしまうわけだ。<sup>[17]</sup>だから、それがお笑いライブであっても悲劇的なお芝居であっても、サッカーで勝っても負けても、同じように涙が流れる。

<sup>[18]</sup>この話は、「ストレス反応」のことを思い出させる。<sup>[19]</sup>今では「心理的な負担」と同義になってしまった「ストレス」だが、元は動物のからだにそなわった一連の反応を意味していた。

（香山リカ2002『若者の法則』pp. 22-23 岩波書店）

ここでコ系の指示表現である [1] の「こんな」、[9] の「これ」および [18] の「この」は、メタ指示表現としての機能を果たすのだが、具体的には、展開していく談話の境界を、その始発点と終結点を示すことで明確なものとしている。あたかも読み手に、進行中の談話部分の区

切りを予測したりまとめたりしながら読め、と指示しているようなものである。境界の始めを[1]の「こんな」で知らせ、[9]の「これ」は、先行部分を受けて次に展開するので、一段落ついたその境界を知らせる。[18]の「この話」は、詳細な説明が加わった話が終わり、次に展開していく境界を知らせる。そして、それぞれその境界線の内側で、ソ系の指示表現が前方照応のかたちをとりながら、ソ的世界を作りながら結束性を実現する<sup>5</sup>。

田中(1981:47)は、コソアの機能に関連して、「聞き手にコンテキストの中に唯一性を持ち特定化されたものが存在するから、それを指示対象とせよというマーク、およびその指示対象をさがし出す際の手がかりとしての機能」があると述べている。指示詞の機能は指示する対象を探す手がかりになるばかりでなく、それと同時に、談話レベルで指示する談話の単位やその境界をも探し出せというマーカーとも言える。この意味で語用論で言うディスコース・マーカー(談話標識 discourse marker)または広義のプラグマティック・マーカー(pragmatic marker)としても機能していると見ることもできる。

## 9. ア的視点と情意

ア系の指示表現については、これまでその情的な意味が論じられてきた。例えば江口(1995:101)は、アがコと同様、「話し手の強い使用の動機に裏付けられた指示詞」であることを指摘し、ソが中立的に文脈中の事物を指示する指示詞であるのと対照的であると述べている。筆者はすでに、ア系の指示表現が対象が遠いところにあり、しかし心情的に思い入れがあることを伝えることに触れた。またその対象が記憶の中に発見できる場合と、具体的な指示対象がない場合があることにも触れた。アが指標する視点と、その意味の解釈について、幾つか例を見よう。まず、読者との共感を狙ったストラテジーとして「あの」が使われる例である。

- (9) よだかはその火のかすかな照りと、つめたい星あかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん、飛びめぐりました。そして思い切って西のそらの、あの美しいオリオンの星の方に、まっすぐ飛びながら叫びました。

(宮沢賢治「よだかの星」新潮文庫『銀河鉄道の夜』1961, p. 24)

ここでは「美しいオリオンの星」でも語用論的には不自然ではないのだが、よだかが向かっていく星に対する共感を求めて「あの」という指示表現が使われる。この場合の指示は非限定的用法であり、厳密には「あの」は何かを指示するというより、何かについての感情を盛り込んでいる情意表現と言う方が正しい。

正保(1981:90)は、ソで指示するはずのものをアで指示する場合の心理について、ア系の表現は「自分が、その対象に対して強い関心を寄せている遙かな存在であるとみなしているそういう心的態度」を示し、それを相手に「押しつけている」のだが、一方、聞き手の方でも、押しつけられていると感じずに、自分の立場と重ね合わせ、感情移入を行なうことで「聞き手/読み手にとって身近な存在であるような感じ」を抱かせることになるかと述べている。確かにこのような



心理の動きがあるように思うのだが、このような心理を可能にするのは何なのだろうか。アで表現された対象は、語り手と相手が共に見つけ、それを共有するように促すのである。相手も語り手になって、その視点にたつ、つまり「なる視点」をとるのであり、ここに「感応的同調」が実現する。

ア系の指示表現は、何かを指示する、またはそう装うソ系と違って、具体的に指示するものが明確でなくても使われることが日常化している。例えば、急に相手にも何なのかわからないのに「あれ、あれだ」とか「あれでしょ」というような類である。実際ア系の指示表現が、専らコミュニケーションを管理するため発話の前置きや前触れとして、また埋め込み表現として間投詞のように利用されることを考えると、ア系を指示表現と呼ぶのは正確ではないのかもしれない<sup>6</sup>。しかし、実際には、ア系の指示表現は、コミュニケーションを管理する機能とともに、同時に従来の指示の機能を果たしていると見る方が正しいと思われる場合も少なくない。

例えば、ある作品全体を見てみると、アが二重の意味で使われていることもあることがわかる。ア系の指示表現は、ある談話で既に導入された内容を遠い視点から指示すると同時に、対象を観念的なものとして記憶の中から呼び起こすこともある。つまり、談話の世界の現場指示的な方法と、話し手と聞き手の思想の中の対象を呼び起こすという観念的な方法と、その両方の機能を同時に果たしていると考えられる。

『イルカと墜落』は、沢木耕太郎氏が、ブラジルで飛行機墜落事故を経験したことを回想しながら綴った旅行記風ノンフィクションである。本の後半では、その事故のことをア系の指示表現を用いて表現する。例えば「文庫のあとがきといい、対談におけるこの台詞といい、もしあの墜落事故で死んでいたら、妙にさまざまなことが符合すると思われたことだろう。」(p.191)や、「打たれたボクサーのように左目の周辺を腫らせ、片足を引きずっているボスエロ氏に対しては、あのような事故が起きたあとでも、私の信頼感は少しも揺らいでいなかった。」(p.205)がある。ここに使用されるアは、すでにこの作品の中に出てきている事故なので、それを遠距離から見る視点から把握したもの、つまり、『イルカと墜落』というディスコース世界の中の指示対象と考えることもできるし、同時に語り手と読み手の記憶の中にある観念的な対象を指すとも考えられる。

いずれにしても、アは遠距離から見るその見えを、「見え先行方略」に基いて語り手と読み手が共に経験することから感じ取ることができる情意を帯びるのである。それは二者が、あたかもある対象がそれぞれ自分を遠い距離におき、その同一の対象を見ながらしかもお互いにそうしていることを理解しているという三角関係を認めるようである。指示表現は、かかわる人と対象との関係を再現することを余儀なくされるストラテジーなのである。

ところで、アは、ソの場合もそうであるが、相手にわかっていない内容を意図的に提示する使用法もある。次の例も同じノンフィクションから抜き出した断片である。

- (10) だが、日曜のパウリスタ大通りは平和そのものだった。駐車場のような一角に骨董市の露店が並び、反対側の公園の前には日曜画家たちが作品を並べて即売をしている。サンバ

ウロは薄曇りで肌寒く、どちらも人出は少なかったが、私は小さな期待を抱きながら歩いていた。

——あの女性はいらぬだろうか。

探すともなく歩いていくと、以前とまったく同じ場所に彼女はいた。

もう日本ではほとんど姿を消してしまったが、弁当箱をひとまわり小さくしたような薄型のマッチ箱がある。彼女はその表面に細密な風景画を描いているのだ。

(沢木耕太郎 2002『イルカと墜落』 pp. 111-112 文藝春秋)

この部分で、語り手は記憶の中から呼び起こされた女性を「あの女性」と表現し、その女性をサンパウロの街に探している。読み手は、そこに語り手の思い入れを感じるのだが、どんな女性か一度も紹介されていないので、わからない。しかし、読み手は「あの女性」という表現に接し、即座にそのような語り手の視点にたつて、つまり「なる視点」にたつて、一緒に探す。「見え先行方略」を利用して解釈するのである。「あの」女性が誰かわからないから、「その」のサスペンス用法と同様、談話にドラマ性をもたらすという面もある。このようにして、アの使用は語り手と読み手の「感応的同調」を促し、確実に情意を帯びてくるのである。

ここで、ア使用の条件について忘れてはならないことがある。それは、江口(1995)の指摘にもあるように、読み手が理解できる範囲のもの、または、読み手にもその記憶の中から呼び起こせるものであると想定してアを使用する必要がある、ということである。江口は、アは話し手の経験指示表現であるとして、その使用条件を規定しているが、聞き手への配慮を欠いて随時にアを使用すると、その文の容認性が著しく下がってしまうと警告している。同様に、堀口(1978)も述べていることであるが、むやみにアを使用することは話し手の一方的なつかしみを表わすので相手にとまどいを与えることになり、それは「社交の問題」(堀口 1978: 85)でもある。確かに語り手は、創造性のために指示表現の使用制限を逆利用するのであるが、それはむやみに行なわれるのではない。言語表現はすべて、相手あつてのものであり、語り手は常に読み手に向けてディスコースを紡ぎ出しているのであるから。

## 10. おわりに

本研究では、限られたものであるが、日本語の指示表現を幾つかのジャンルのディスコースの現象として考察した。指示表現は語り手の視点を指標するものであり、その視点を基盤に「なる視点」、「見え先行方略」などを通して意味の解釈がなされ、そこには「感応的同調」によって解釈される情意があることを論じた。その情意とは、具体的には情的な共感であつたり、心理的な遠近という距離のとり方であつたりする。さらに、指示表現は言語行為を性格付け、談話の境界をより鮮明に示し、例えば作品全体といった談話全体に一貫性をもたらしたり、より小さな断片の中で、先行する要素との結束性を実現したりする。このように、指示表現は複数の機能を同時に果たしながら、そしてその視点の位置関係や視点移動の痕跡を残しながら、あくまで語り手の表現のストラテジーとして機能する。

ここで、本研究を通して明らかになった言語に対する理解の仕方について触れておきたい。筆者はメイナード(2000)で、場交渉論では基本的にパースの記号論を継承して、言語の記号に icon, index, symbol の三種があるという立場をとった。icon とは、記号が現場にある対象と何らかの類似性を有している場合であり、index とは、記号が、対象が存在する時や場と関連して意味付けられる場合である。symbol とは、従来言語がそうであるとされてきたように、記号と対象との間に類似性を認めないし、記号と意味との関係があくまで恣意的なものであると見られる記号を指して言う。指示表現は、index としての性質を強く持っているが、その意味が時や場などのコンテキストとの関係においてこそ解釈されるものであることを確認しよう。興味深いことに、本研究で明らかになったことは、index としての指示表現が、対象をそのコンテキストに置くだけでなく、その対象を見つめる語り手をも語りの世界に位置付けることになるという点である。指示詞はこのような二重の意味で言語行為の指標機能を果たしていると言える。

指示表現についての研究はこれからも、いろいろな側面から続けられていくであろう。本研究は限られた現象を考察したにすぎないが、談話言語学の一研究として、いくつかのディスコースにおける指示表現の情意を垣間見ることができたのではないかと思う。

#### 注

- 1 金水・田窪編(1992)に、佐久間(1951)以後の指示詞の研究の主なものが収録されている。なおその中の金水・田窪(1992b)に、指示詞研究の歴史が紹介されている。
- 2 筆者は、談話という表現をいわゆる話し言葉としての談話と、書き言葉としての文章の両方を指して使う。また談話の実例として、ある談話の断片を指してディスコースという表現も使う。
- 3 この点に関連して、堀口(1978)の興味深い指摘がある。堀口は従来の現場指示と文脈指示という区別の仕方は不十分であるとし、「知覚対象指示」と「観念対象指示」という概念を加え、これらが従来の現場指示と文脈指示とどのように交差するかを説明している。
- 4 [4] では「あれ」が使われているが、これは読者と共有するイメージに訴えながら「感応的同調」を狙ったものである。
- 5 [9] の「この高校生」は、先行する談話で紹介された学生であり、「その高校生」としても不自然ではない。「この高校生」という表現は、語り手がその学生の近い位置に自分を置き、その視点から描写していて、「その高校生」に伴う距離感を避けながら、対象を語り手の近くに引き寄せているからである。そしてこの表現はとりもおさず、読者にも対象を「この高校生」として経験するようにアピールすることになる。
- 6 例えば迫田(1993)は「あれ」が会話のストラテジーとして用いられることをあげ、それを仮置き型と代用型に分けて、その機能を明らかにしている。また Hayashi(2004)は action-projection という概念と会話のなかで使われる「あれ」の関係を論じている。例えば「そのう、最近あれなんです、あのう、ガス管あるじゃないですかあ。あれ全部今プラスチックになりつつあるんですよ、どんどん、鉄から」(Hayashi 2004:1339)という発話において「あれなんです」という表現が話者交替の始めの方で後続する内容を前もって projection するようなケースである。この場合「あれなんです」が前触れとして、早い時期に聞き手との視点を調整することで「見え先行方略」へ導く機能を果たしていると見ることができる。

## 参考文献

- 庵功雄(1995)「テキスト的意味の付与について一文脈指示における『この』と『その』の使い分けを中心に一」『日本学報』14, 79-94, 大阪大学文学部日本学科
- 庵功雄(2002)「『この』と『その』の文脈指示的用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』5, 5-16, 一橋大学留学生センター
- 市川浩(1975)『精神としての身体』勁草書房
- 江口巧(1995)「日本語の指示詞コソア」『言語科学』30, 89-104, 九州大学言語文化部言語研究会
- 金水敏(1990)「指示詞と談話の構造」『月刊言語』19(4), 60-67, 大修館書店
- 金水敏・田窪行則(1992a)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」金水敏・田窪行則編『指示詞』, 123-149, ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則(1992b)「日本語指示詞研究から／へ」金水敏・田窪行則編『指示詞』, 151-192, ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則編(1992)『指示詞』ひつじ書房
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
- 佐久間鼎(1983)『現代日本語の表現と語法』(増補版)くろしお出版
- 迫田久美子(1993)「コミュニケーションにおける『あれ』の用法と機能」『日本語教育』80, 195-196, 日本語教育学会
- 正保勇(1981)「『コソア』の体系」『日本語教育指導参考書8 日本語の指示詞』, 52-122, 国立国語研究所
- 高崎みどり(1990)「指示表現」寺村秀夫他編『ケーススタディ日本語の文章・談話』, 34-45, おうふう
- 高橋太郎・鈴木美都代(1982)「コ・ソ・アの指示領域について」『国立国語研究所報告71 研究報告集』3, 1-44, 国立国語研究所
- 田中望(1981)「『コソア』をめぐる問題」『日本語教育指導参考書8 日本語の指示詞』, 1-50, 国立国語研究所
- 堤良一(2002)「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122, 45-77, 日本言語学会
- 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書院
- 長田久男(1995)『国語文章論』和泉書院
- 馬場俊臣(1992)「指示語の文脈展開機能」『日本語学』11(4), 26-32, 明治書院
- 林四郎(1983)「代名詞が指すもの, その指し方」『朝倉日本語新講座5 運用』, 1-45, 朝倉書店
- 堀口和吉(1978)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8, 23-44, 大阪外国語大学研究留学生別科  
(引用は, 金水敏・田窪行則編(1992)『指示詞』, 74-90, ひつじ書房 所収による)
- 堀口和吉(1990)「指示詞コソアの表現」『日本語学』9(3), 59-70, 明治書院
- 松本正恵(1992)「『見ること』と文法研究」『日本語学』11(9), 57-71, 明治書院
- 宮崎清孝・上野直樹(1985)『視点』東京大学出版会
- メイナード, 泉子・K. (1997)『談話分析の可能性: 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- メイナード, 泉子・K. (2000)『情意の言語学: 「場交渉論」と日本語表現のパトス』くろしお出版
- メイナード, 泉子・K. (2004)『談話言語学: 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版

- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hayashi, Makoto. (2004) Projection and grammar: Notes on the 'action-projecting' use of the distal demonstrative are in Japanese. *Journal of Pragmatics* 30, 1337-1374.
- Maynard, Senko K. (2002) *Linguistic emotivity: Centrality of place, topic-comment dynamic, and an ideology of pathos in Japanese discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Niimura, Tomomi. (2003). Contrastive analysis of Japanese and English demonstratives: Differences in speaker stance. Unpublished dissertation, University of London.
- Uspensky, Boris. (1973) *A Poetics of composition: The structure of the artistic text and typology of a compositional form*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.

(投稿受理日：2005年3月1日)

(最終原稿受理日：2005年11月14日)

---

泉子・K・メイナード (せんこ けい めいなード)

ラトガース大学

Rutgers University

Dept. of Asian Languages and Cultures

Scott Hall 330

43 College Avenue

New Brunswick, NJ, USA 08901-1164

maynard@rci.rutgers.edu

# Emotivity of demonstrative expressions:

## A strategy for presenting narrator perspectives

MAYNARD, Senko K.

Rutgers University

### Keywords

demonstrative expressions, discourse, perspective, narrator, emotivity

### Abstract

This study investigates the emotivity expressed through certain demonstrative expressions in Japanese discourse. Based on the concept of perspective (or point of view), and the interpretive process associated with shared perspectives, I offer the following characterization of demonstratives: (1) *ko*-expressions function as a meta-linguistic device as well as a strategy for describing the referents from close (emotionally intimate) distance, (2) *so*-expressions function as an anaphoric device realizing information-based cohesion while maintaining distance, and (3) *a*-expressions encourage emotive readings by evoking shared thoughts from distant memory and experience. In addition, demonstrative expressions offer a means to locate the narrator, function as a strategy for shifting narrative scenes, and provide a way to manage the communication itself. It is emphasized that ultimately demonstrative expressions, by extending the basic potential meaning associated with physical distance, reveal the attitude and feelings the narrator has toward certain objects and situations.